

新しいアサリの保護育成技術について

栽培漁業グループ

従前から愛知県では、豊川河口で発生するアサリ稚貝を採捕して各地の漁場へ放流し、成長してから漁獲しています。しかし、近年、放流した稚貝が餌不足等により秋冬季に減耗しており、アサリの生残率を高める放流技術の開発が必要となっています。

そこで当グループは、県内にある漁業用ロープメーカーとの共同研究において、放流後の稚貝の生残率を高めるため、生分解性網袋（図1）を用いた保護育成技術の開発を進めています。今回は、これまでの研究成果や使用方法について紹介します。

使い方は至ってシンプルで、秋口に稚貝 2kg と砂利 10kg を生分解性網袋（100cm×50cm）に詰め、麻ひもで口を縛り漁場に投入するだけです（図2）。網袋の中で保護された稚貝は、体力の消耗が少なくなるので冬を越して、翌年夏頃には漁獲サイズに成長します。その頃には、網は分解されて操業の支障となる心配もありません。海での実証試験では、いくつかの網袋を設置して約 10 カ月経過した場所で 3 分間曳網したところ、約 77kg のアサリが漁獲され、十分な保護効果を確認しました。一方、使い方にはいくつかコツもあり、投入時期は海水温が概ね 20℃を下回ってから漁場へ投入しないと、網袋の分解が早く進んでしまい、冬を超える前に網が消失するので、十分な保護効果が得られません。また、欲張って稚貝を袋に詰めすぎると、餌が足りずに痩せてしまうので、生き残りが悪くなります。

この技術は誰でも簡単に使えますが、一方で、各漁場に適した使い方があるので、まずは試してみることが大切です。使ってみたいという方は、どしどし水産試験場へお問い合わせください。



図1 開発した生分解性袋網



図2 生分解性網袋の使用風景

（①、②海上で網袋へ砂利を投入 ③、④漁船の選別台で稚貝を詰める
⑤、⑥麻ひもで封入し、袋を海上から漁場へ投入）

矢作川水系における付着藻類調査について

内水面漁業研究所 内水面養殖グループ

当グループでは、内水面増殖指導の一環として、河川漁協に対しアユの放流に関する助言等を行っています。

令和6年度は、矢作川水系の河川漁協からこれまでアユを放流していた漁場にアユが定着しにくくなったとの相談を受け、その要因を解明するため、アユの餌となる付着藻類の量を調査しました。

今回は、アユの定着が良好な漁場1地点と不良な漁場2地点の石を採取し、過去に作成した付着藻類量の見比べ表を用いて、石に付着した藻類の色の濃さから簡易的に付着藻類の量を推定しました（図3）。

その結果、5月から7月のいずれの期間においても、アユの定着が良好な漁場の方が不良な漁場に比べて、付着藻類が多かったことが分かりました（表）。

また、一般的に、付着藻類が十分に繁茂した漁場は、付着藻類の量が 10g/m²以上あるのが望ましい漁場と言われていますが、不良な漁場では放流直後に当たる5月の付着藻類の量が際立って少なかったことから、不良な漁場に放流されたアユは、餌料不足のため他の漁場に移動した可能性が考えられました。

さらに、今回の調査では、良好な漁場でも付着藻類の量が平均して 4.5g/m²しかなかったことから、餌料環境が良くなかったことが分かりました。

アユを放流する際は、漁場の餌料環境を把握することが大切です。今回実施した調査方法は、特別な調査器具を用いずに付着藻類の量を判断することができます。詳しい調査方法等は、水産試験場へお問い合わせください。

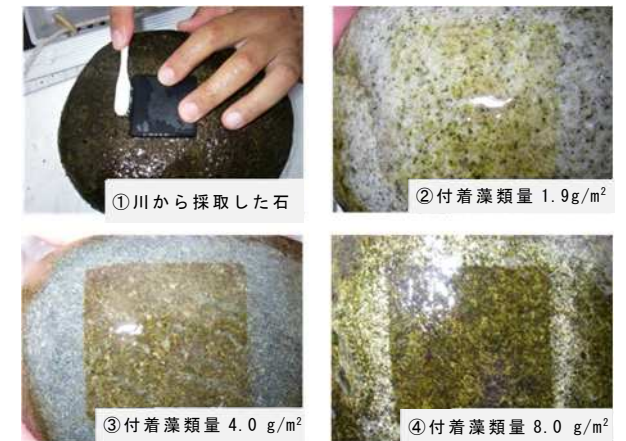


図3 付着藻類量の見比べ表（抜粋）

表 各漁場の付着藻類の推定結果（g/m²）

漁場	5月25日	6月5日	7月26日	平均
良好な漁場	3.9	4.4	5.3	4.5
不良な漁場1	2.9	4.0	4.3	3.7
不良な漁場2	2.7	2.8	3.9	3.1

愛知の水産研究活動報告会開催のご案内

本場 企画普及グループ

研究会や青年部が日頃の研究活動を発表し、情報交換や活動成果の普及を図る報告会が開催されます。また、報告会では三谷水産高校による体験発表も行われます。ぜひ、ご参加ください。

- 日時及び場所 令和7年6月7日（土）午後2時～、愛知県水産会館5階大会議室
- 報告内容
 - ①大あさりの資源増殖に向けた取組（日間賀島潜水組合青年部）
 - ②西三のり研究会交流事業報告（西三のり研究会）
 - ③福江湾におけるカキ養殖の取組について（東三河漁協青年部連絡協議会）
 - ④地域活性化のための地元企業との共同研究について（三谷水産高校水産食品課3年）